整復後重篤な麻痺を生じた 第5頸椎前方脱臼の一治験例

中国労災病院整形外科

東 儀 敬 哲・松 島 興 夫
永 田 義 紀・木 下 博

Cord Injury After Reduction of Cervical Spine Dislocation —A Case Report—

By

Y. Togi, O. Matsushima, Y. Nagata & H. Kinoshita

From Department of Orthopedic Surgery, Chugoku
Rosai Hospital, Kure, Hiroshima.

A male, aged fifty-six, had sustained a anterior dislocation of the 5 th cervical vertebra with lock of unilateral articular process by falling down from the head.

There had been no clinical evidence of cord injury except for the 6 th cervical root involvement of the right arm.

After 10 hours of closed reduction, patient begun to complain sever back pain and symptoms of cord pressure slowly developed untill he could no longer move his extremities.

The examination of cerebrospinal fluid revealed complete spinal canal block.

Surgical treatment was attempted after 65 hours of reduction.

Protrusion of ruptured cervical disc between 5 th and 6 th was found and excised, and 5 months after anterior spinal fusion almost all neurological signs have disappeared.

右上肢のみに軽度の麻痺を合併した第5頸椎前方脱臼を牽引により整復し、重篤な脊髄麻痺を生じ、その原因が椎間板によることを確かめた症例を経験したので報告する。

症 例

患者 56才 男子 季節労働者

主訴 右肘関節の屈曲障害

現病歴 約2m位の高さから転落し、頭頂部を打って挫創を生じた。直後、四肢の脱力感を生じ自動運動不能でしたが、約7時間後下肢から次第に回復し翌日歩いて来院した。

初診時所見 右肘関節の屈曲が不能な他は、四肢、軀幹の反射は正常で知覚、運動障害も認めない。

X線所見 前後像では棘突起列が第5頸椎より中椎は右側にかたより、側面像では第5頸椎が椎体の巾の約1/3だけ前方に転位している(図1)。

図 1

経 過

入院後直ちに頭蓋直達牽引を開始し、レ線コントロールのもとに慎重に9kgまで増量したが、片側の関節突起のlockがはずれず整復されなかった。外観的にも顔面は左側を向いたままであった。そこで受傷後

5日目に徐々に増量し、13 kg に達したところ、整備された感じを訴えたので、レ線撮影で整備が確認できた。その後は牽引を次第に6 kg まで減じて維持した。ところが整備10時間頃から両下肢から背部にかけて筋肉がひきつけるような、また両下肢がひきぬかれるような疼痛と異和感を訴え、翌日左肘関節の伸展が不能となった。そこで牽引を3 kg に減じたが、麻痺は更に進行し、右上肢の運動は全く不能、左上肢は肘関節屈曲と前腕回旋以外は不能、両下肢の自動運動も不能となった。知覚は第8肋間以下が鈍麻、軀幹筋も麻痺し膀胱直腸障害を認めた。

髄液検査 初圧 50 mmH₂O 終圧 0, Xanthochromia (—), Queckenstedt 陽性で脊髓腔の block が考えられた。

手術所見 麻痺発生後65時間でRobinson法により手術をした。第5, 6頸椎間で椎間板が断裂し、その軟骨様の破片が右側後方にはみだして脊椎管内に膨出し、これが腹側から脊髓を圧迫していたので、これらを除去し前方固定を行なった(図2)。

図 2

術後経過 術後直ちに疼痛が消失し翌日から両膝の伸展、左肘の屈曲が可能となり、次第に他の運動も回復しはじめ3日後には自尿も可能となった。2ヶ月半で歩行訓練を開始し、術後5ヶ月の現在、階段昇降は可能であるが、上肢は右肘関節屈曲の筋力減弱、両手のシビリ感、小手筋の萎縮を残している。

考 案

本例は極めて慎重に整備操作を行ない、その経過中には何等の異状もなかったが、10時間後に急に疼痛と麻痺が出現し、はじめはその原因がなんであるか苦

図 3

慮した。牽引が強いのかと考えて減量したが、麻痺は更に増強し、椎間板の脱出であろうと推測し、手術をするまでに重篤な四肢麻痺に進展した。頸髄損傷に椎間板が主因となることは諸家の報告にもあり、当院でも頸髄損傷剖検例18例中4例を経験した。そのうち脱臼に伴って断裂した椎間板が脊髓を圧迫している症例もあり、他方頸椎を上下から圧迫すると椎間板が後方に膨出し、牽引すると膨隆が消失する症例で、生存中牽引により麻痺の軽快を見た。本例はこれとは逆に関節突起がlockしているときは、椎体が上下に離開していたが、lockがはずれ整備するとともに近づいて椎間板の破片が後方に押されて、脊髓を圧迫し麻痺が生じたもので、いわば整備に伴う不可避免なことであつたと思う(図3)。われわれの症例に起つたことは稀と思うが、万一整備後にこのようなことが生じた場合には、髄液検査やディスコグラフィー、ミエログラフィーなどを行ない原因を確かめて前方より侵入して、椎間板を切除する必要があると考えられる。椎間板の脱出による単純な圧迫でも長時間経過すると、脊髓に不可逆的な変化を生じ、回復不能な四肢麻痺を残すことがある。われわれの例は、麻痺発生から65時間後手術を行ない、幸い回復をみたが、重篤な合併症と思われたので報告した。

意見 山陰労災病院整形外科 新宮 彦助

23才男子ダンプ運転中転落、C5/6脱臼、完全麻痺、頭蓋直達牽引8 kgで整備され、牽引装置を除去する前に、前方固定術をおこなった。椎間板の1 cm×0.3 cmの破片が上位椎体後方に脱出していた。本例は麻痺の回復は認められなかったが、手術時硬膜外方にチューブを挿入し、持続冷却法を試みている。

追加、質問 愛媛労災病院整形外科 蓑毛 正己
症例 24才、男子。

S. 48.8.31. 交通事故、四肢疼痛と右上下肢の完全麻痺を来し、2日後より左上下肢の運動麻痺も出現

し、漸次麻痺が増強し、S. 48.9.3. に転医、来院した。第5頸椎の前方脱臼で来院時四肢完全麻痺、第5頸髄節以下の完全麻痺例、直ちに全身麻酔下にサクシンを投与して Glißursche Sching を使用して徒手整復して前方固定術を施行したが脊椎管内に大きく2分され、且つ骨片が附着している椎間板が嵌入しており、これを摘出した。

術後経過良好で銀行員として現職に復帰している。私は脱臼頸椎を可及的に早く整復して、脊椎の圧迫を除去し、椎間固定術を施行する際に椎間板を精査する

必要があることを強調する。

なお脱臼整復には症例によっては、全麻下に、下関節突起で脊椎を圧迫せぬように、頸椎前屈位で徒手整復すると極めて簡単である。

回 答 中国労災病院整形外科 木下 博

われわれの例は脊髄麻痺症状がなかったので、全身麻酔をかけることなく、有意識下にレ線コントロール下に重錘をふやしてゆき、きわめて慎重に整復を行いました。

Post-pregnancy Osteoporosis の 経 験

山口大学整形外科教室（指導：服部奨教授）

吉 田 義 夫・小 山 正 信
柴 田 輝 明

Two Cases of Post-pregnancy Osteoporosis

By

Y. Yoshida, M. Oyama & T. Shibata

Yamaguchi University School of Medicine Ube,
Yamaguchi (Director: Prof. S. Hattori)

Two cases of the post-pregnancy osteoporosis is reported.

Case 1. A house-wife of thirty-two years complained of back pain two months after labour without apparent cause.

Case 2. A female of twenty-five years felt a sudden sharp pain in the lumbar region on straightening up from a bending posture about two months after normal delivery.

Both of our cases showed typical and severe osteoporosis radiographically. No remarkable changes was recognized on laboratory studies. Some benefits, particularly in radiographical and clinical sign, were obtained by pharmaceutical therapy such as calcitonin, calcium, vitamin D and anabolic hormone in both cases.

脊椎骨粗鬆症はしばしばみられる疾患であり通常 senile ことに post-menopausal に発病することは周知の事である。最近私たちは若年者でしかも分娩後に発症したと思われる稀な脊椎骨粗鬆症を経験したので報告する。

症 例

症例 1 32 才、主婦。

主訴：背部痛

現病歴：昭和 45 年 9 月 27 日初産。2 カ月後より誘因なく次第に背部痛をきたし、某医で腰痛症の病名にて、軟性コルセット装着し経過観察したが、疼痛は軽快しない。さらに分娩後 5 カ月頃より背部痛増強する為当科受診する。

初診時所見：体格中等度、栄養やや劣、脊椎は腰椎前彎が減少しており、全体として硬直が著明である。自覚的には背部痛を強く訴える。他覚的には運動制限と運動痛強く第 7 胸椎部、第 1 腰椎部に叩打痛を認め